

インタビュー



まえだ てっぺい
前田 哲平さん

キヤスク代表、株式会社ワードローブ代表取締役CEO

着たい服を着れる喜びを リーズナブルに すべての人に



私たちが普段何気なく選び、身に着ける服。しかし、障害のある人や病気を抱える人の悩みの一つに、既製服をそのまま着るのが難しいという問題があります。そのような人のために、服のお直しサービスを提供するキヤスク代表の前田哲平さんにお話を伺いました。

（インタビュアー：藪本 雅子（やぶもと まさこ）：日本テレビアナウンサー、同報道局記者を経て現在フリーで活動）

藪本 体が不自由な人に向けての洋服のお直し、ありそうでなかったサービスですね。

前田 どうしても障害や病気では体が不自由ですと、自分の好みよりも着やすいかどうかで洋服を選ぶことになります。自分の好みを諦めるのではなく、まず着たい服を選んで、後からその方の体に合った着やすい形にお直しをするというサービスです。

藪本 うれしいと思う人がたくさんいるでしょうね。そこに至った理由を聞かせてください。

前田 私のもと、2020（令和2）年までユニクロを運営する株式会社ファーストリテイリングで働いていました。またまた聴覚障害のある同僚がいました。その方から、身体障害のある知人は着る服がなくて困っていると聞きました。ユニクロはあらゆる人のための洋服というコンセプトで、服を作って販売していますので、洋服が届いていない方がいることに、自分としては衝撃を受けたのです。でも私は障害のある方が周りにいなかったもので、イメージできませんでした。仕事というよりは個人的な活動として、体の不自由な方に洋服の困り事をヒアリングしたのです。

前田 哲平さん

ユニクロを展開するファーストリテイリングにおいて、介助を必要とする子ども向けボディースーツの開発プロジェクトをはじめ、高齢者や障害者が買い物しやすい店舗づくりなどに携わる。2021（令和3）年1月に独立し、（株）ワードローブを設立。翌年3月に既製服のお直しサービス「キヤスク」をスタートした。

●人の好み、着にくさは無限

藪本 どうやってヒアリングをしたのですか。

前田 バリアフリーの情報発信をしている障害者の支援団体に飛び込みで懇願し、車椅子ユーザーの飲み会に参加させてもらったり、ユニクロの店舗に来ていただいたり一緒に店内を回り、どういう服が着にくいのかを意見を聞いたりしました。また、座談会を企画しましたし、インターネットで大がかりなアンケートも行いました。2018（平成30）年から3年間で800人ぐらい、障害や病気を抱える人に洋服の困りごとを聞きました。皆さんとても懇切丁寧に教えてくださいました。それまでこんなことを聞かれたことがなかったということでした。

藪本 例えばどんな困りごとがあったのですか。

前田 指先が不自由なのでボタンが留められない、肘が曲げられないのでかぶり物は厳しいなど、様々です。身体障害のある方向けの洋服ブランドもありますが、種類も少ないし、値段も高い。何より、着たい服ではなかったりする話を聞けば聞くほど発見がありました。着る服がないってどういうことなのかなと思って話を聞き始

めたのですが、つまり、着やすさを優先しないといけないので自分の好みの服を選べない。そういう意味で選択肢が非常に少ないことで困っていらっしまったのです。その思いは、障害の種類や年齢に関係なく共通していました。

藪本 一人一人、事情が違うので、同じお直しでは対応できないですね。

前田 そうです。障害の種別に関係なく、一人一人着やすさのポイントとは違います。脳性まひで体が自由に動かないといっても、それぞれ程度が違うし左右差もあります。車いすの方で、上半身も動かしづらい人もいれば、上半身は割と動く方もいる。ズボンを直すといっても、はきやすいと感じるポイントが全然違うのです。結局、人の好みは無限にあって、人の着にくさも無限にあります。だから、障害者向けの特別な服を作るのは本質的な解決にならないと思います。それで、もともとあるものを後からその人に合わせてお直しをすれば、自分の好みの服が着られないことに悩まなくて済みます。そのほうが根本的に解決できる方法になるとんじゃないかと思いました。

藪本 いいですね。でも、それをユニクロにいながらやろうとは

思わなかったのですか。

前田 ユニクロではこの経験を生かして前開きインナーの商品開発プロジェクトを主導しました。その中でも「子ども用ボディースーツ」はSNSやテレビなどでも大きな反響がありました。また、全国ユニクロ店舗で障害者や高齢者がより買物しやすいように、環境改善に取り組むプロジェクトも立ち上げました。ただ、ユニクロで、一人一人の事情に合わせたお直しのサービスを作る方法もあったと思うのですが、ユニクロ以外の服も着たいと思いますよね。だから、ユニクロも含めて、世の中のあらゆる服のブランドに対してサービスを提供した方がいいと思います。正直、安定した仕事をやめることに迷いはありました。でも、今、挑戦しなかったら後々後悔すると思いました。やるからには、本気でやろうと、ユニクロを2020（令和2）年末に退職して、株式会社コワードローブを立ち上げました。その事業の一環として、クラウドファンディングで資金を募り、2022（令和4）年3月からキヤスクのサービスを開始したのです。

●舞台の役をつなぐ

藪本 キヤスクでは自分の持つ

ている服を直していただけるのですね。

前田 そうです。基本的にはご自身のお手元の洋服をキャストの自宅に匿名で送っていただく。それをキャストが自宅でお直しをして、また戻ってくるという形です。新しい服を想定していたのですが、それよりも、障害や病気で着られなくなったけど捨てられない服とあったご要望が意外と多いですね。お兄ちゃんが気に入っていた洋服を弟に着せたいが、弟は障害があるって着られないので直してほしいというのもありました。

藪本 お直しスタッフのことをキャストと呼ぶですね。デイズニールランドのよう。

前田 私の役目は、お客様とキャストをつなげる場を作って運営すること、キャストの方がお客様に対してやりがいと優しさを持って接して、その結果、お客様に喜んでいただくことが最も大切なことです。キャストの舞台の主役という意味ではデイズニールランドと同じ。もうひとつは、キャストの人、という意味でキャスト。言葉遊びみたいな感じです。

藪本 匿名配送なのは どうしてですか。

前田 キャストとして参加くださっている方は、障害のあるお子

さんやご家族をお持ちで、洋服の選択肢の少なさを体験してらっしゃる方だったりします。だからこそ、このサービスに共感してくださるのです。家族のために必要に迫られて習得した技術を、今度は他の人にできる範囲で提供したいという志ある個人が参加しやすいように、住所が出ないような形で行っています。

藪本 一人一人、お直しポイントが違うので細かい要望を聞かないとできないですね。

前田 実際にキャストとお客様のやりとりが始まったら、1対1のコミュニケーションルームがシステム上の中にできます。そこはLINEのように、チャットや画像を使ってやりとりできます。

藪本 今はZoomなど便利なものもありますしね。

前田 いえ、Zoomは使いません。キャストの方もそれぞれご家族もあり、介護などもあるでしょう。お客様にもご自身の生活ペースがあります。隙間時間で対応できるようにチャットにしています。

藪本 なるほど。マイペースでできるから、働きやすいし利用しやすい環境なのですね。それに、自分の技術が人のためにもなり、お金にもなる。やりがいを感じら

れる仕事ですね。

前田 フルタイムで働けないという悩みもありますから、ご自身の空いた時間でできるようにしています。生計を立てるまでの収入にはならないですけど、お小遣い稼ぎにはなるでしょうか。

藪本 しかし、かなり良心的な値段ですよ。

前田 一般のお直し店舗に比べていくよりも、明らかに安いはずですよ。でも、お客様の手が届きやすい値段にしたいと思ったのですが、キャストの方に対してはボランティアという形にはしたくない、この値段の8割をキャストさんにお支払いしています。

藪本 前田さん、ご自身の生活は大丈夫ですか。

前田 個人的に副業というか、コンサルティングの収入でなんとかやっています。

藪本 軌道に乗るまでは、赤字覚悟なのですね。応援します。

● **誰もが着たい服を着る世の中に**
藪本 今後の目標をお聞かせください。

前田 株式会社という形で起業しましたので、ビジネスとしてずっと続けられるだけの利益を出せる形をまず作るのが目標です。1つは、いろんな形でたくさんの人

＊お直しの例＊



●脇開き：腕が曲がりにくい方や肩が上がりにくい人向け



●後開き：座位がとりにくい人など向け



●股開き：股関節やヒザが曲がりにくい人向け



●痔瘻対策：座っている時間がとても長い人など向け

にお直しをしていたり、体の不自由な人、そうではない人が一緒にいる集団——職場やスポーツチームなどですが、その方々が一緒に着られるユニホームのサービスを始めた。例えば、プロスポーツの応援ユニホーム。体が不自由な方はボタンが留めにくいから買うのをあきらめたり、着にくいけれど無理して着ていたりするわけです。そんな野球ファン、Jリーグファンの方が大勢いらっしゃる。そういうユニホームのお直しサービスを球団と一緒にできたらいい

なあと考えています。あとは、特別支援学校の制服や学校で着る体操服も着にくいものを我慢して着ているのだろうと思います。困っているだろうと思うところに、きめ細かくアプローチしていきたいと思っています。

藪本 今、運営体制はどうなっていますか。

前田 サービスを開始してまもなく1年になりますが、運営は私1人でやっています。今後、人材を採用していく際に、もちろん能力や事業に共感してくれることが第一ですけど、できれば当事者の方

が一緒に加わってくれるようになればいいなと思います。今、車椅子ユーザーの女性がお直しの実例をキヤスクのインスタグラムに投稿する作業を手伝ってくれていてとても助かっています。キヤスクではみんなが主役になることを目指しています。例えば、お直しをした服を着て、モデルとして出るとか、そんなこともやればいいなと思います。キヤスクの理念から外れないように、キヤスクの強みを生かした新しい事業と一緒に育てていきながら、全体としては利益が出ているような形にした

新年を迎えて



（公財）

人権教育啓発推進センター
理事長 坂元 茂樹

謹んで新春の御挨拶を申し上げます。日頃より当センターの人権教育・啓発活動に御支援と御協力を賜り、深く感謝申し上げます。

2019（令和元）年末から続く新型コロナウイルス感染症の世界的感染拡大から3年以上が経過し、その間、感染者や医療従事者、ワクチン未接種者などへの差別的な言動が社会的問題となりました。未だに新型コロナの収束が見られない中、感染者等に対する人権的配慮は欠かせません。

去年は「水平社宣言」から100年という大きな節目の年でした。そして今年は、「婦人の参政権に関する条約」採択70周年をはじめ、「障害者基本法」施行から30年、「障害者総合支援法」施行から10年、「個人情報保護に関する法律」施行から10年、そして「いじめ防止対策推進法」施行から10年目の節目の年であり、当センターとしても、これらの人権課題に対して更なる教育・啓発活動を推し進めたいと考えております。

また、企業活動における人権デュー・ディリジェンス導入促進のために、2020（令和2）年に「『ビジネスと人権』に関する行動計画（2020-2025）」（NAP）が、昨年9月には「責任あるサプライチェーン等における人権尊重のためのガイドライン」が策定されています。

当センターといたしましても、読者をはじめ、地方公共団体、企業、国際機関、府省庁、その他様々な機関と緊密に連携し、御支援を賜りながら、人権教育・啓発活動に取り組んでまいります。

いと思っています。
藪本 高齢者も着たい服の選択肢が少なくなってくると思います。
前田 そうですね。ご高齢の方は現状のネット対応だけではちょっとハードルが高いかもしれません。オンラインサービスは全国どこからでもアクセスはできていいのですが、やはりリアルに見るタッチポイントが全国各地にほしいですね。そうだった時に、地方で、地域で自分を中心になつて、キヤスク活動をお願いしますと一言でくださる方がいたら、喜んで一緒にやってみたいですね。まずは、考えるだけでもいいので。

藪本 気安く仲間を増やしていきたいという感じですか。
前田 キヤスク仲間、本当にそうそう。
藪本 まずは、地域の人たちに知ってもらうことですね。
前田 地域の人が集まる場所に、洋服のここを直してほしいと手書きで書いてもらって、洋服と一緒にポストに入れておいてもらう。それを定期的に回収して、それをキヤスクに送ってお直しして、またそこに戻すとか。お直しのノウハウはかなり蓄積されてきましたのでやることはたくさんあります。興味を持っていただけ

たら、是非一緒にやっていただきたいし、まずは、こんなサービスがあることを知ってもらいたい。未来の社会に絶対に必要なものを皆さんと一緒に作っていききたい。誰もが着たい服を着られる世の中にしていきたいのです。



●キヤスク

<https://kiyasuku.com/>

